

二〇二二年度 卒業論文

浄土真宗における宗教教育の広がりと今

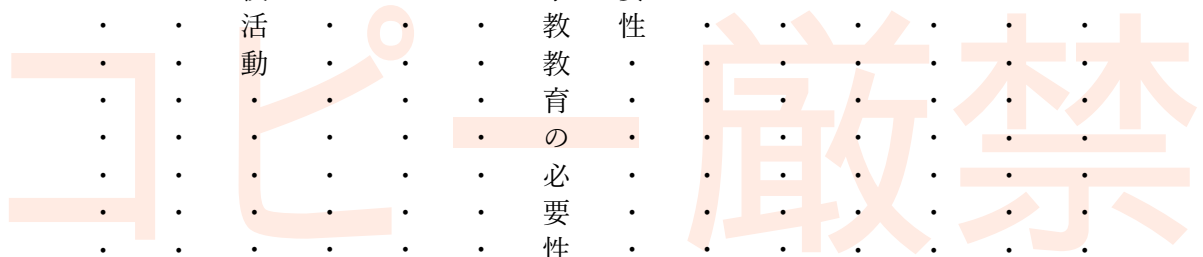
コピー厳禁

L190052

坂口 顕正

目次

序論	1
本論	2
第一章 宗教教育とは	2
第一節 宗教はなぜ必要なのか	2
第二節 宗教の「教育」とは	4
第二章 浄土真宗と宗教教育	7
第一節 浄土真宗における宗教教育の必要性	7
第二節 教団にとっての少年期における宗教教育の必要性	10
第三章 浄土真宗と日曜学校活動	11
第一節 浄土真宗の日曜学校のはじまり	11
第二節 日曜学校の意義	13
第三節 龍谷大学の宗教教育部と日曜学校活動	14
第四章 宗教教育の問題	17
第一節 宗教教育全体の問題	17



第二節 浄土真宗の日曜学校での問題点

結論 20

註

参考文献

コピー厳禁

序論

今日の日本において、人々の無宗教化だけでなく、僧侶自身の意識低迷により、仏教が衰退の危機に瀕していると言われている。本来、宗教心が豊かであるはずの日本人であるが、地域のコミュニケーションの中心としての役割があった寺院が、現代社会の様々な問題に苦しむ人々に寄り添うことが出来ていないというのが現状である。

このことは、子どもたちへの宗教教育にも影響を及ぼしている。子どもへの教化活動を行ったからといってすぐにお寺へのお参りや門徒が増えるわけではないが二〇年、三〇年後にお寺の門徒になってくれる可能性がある。また、信楽峻磨氏は以下のように述べている。

皆さんの現場の宗教教育は、卒業によって完結することではなくて、とにかく種を蒔いておくということですね。そして、少しでも蒔いた種が真っ当に育つようにするという配慮が大切なことです。私もいろんな宗教教育をやってきた中で、その時のことが縁になって、後々になって訪ねて来てくれる人があります。人生に悩み、迷って、行くところがないから来たと言ってやって来ます。¹

まずは種を撒くことで、その人が生き詰まった際の支えになることがあり、それが縁となりお寺に繋がることがある。

次の世代を担う子どもたちへの宗教教育は、お寺のこれからを考えると切っても切れない。このテーマで卒業論文を書く事で浄土真宗の宗教教育の歴史や発展、そして現代ではどの様に子どもたちに布教、伝道されている

のか。また、私自身が宗教教育部という部活に所属していることもあり、自分が携わっている浄土真宗の宗教教育はどのように発展してきたのか関心を持ったのでこのテーマとした。宗教教育部がどのような活動を行っているかは、後に論じる。

本論

第一章 宗教教育とは

第一節 宗教はなぜ必要なのか

宗教教育について、これから論じていくが、最初になぜ「宗教」が必要なのかということと、宗教の「教育」の意義とはなんであるのかについて、それぞれ検討しておこう。まず「宗教」が必要なのか、そして、その「宗教」とはどういったものかについて、確認しておこう。まず「宗教」の必要性については、宗教教育学の立場からは、以下のように述べられている。

人生には思いがけないことがときどき起こる。自分さえしっかりしていれば大丈夫だと思っても、どんなことで災難に出遭うかもしれない。ところが、大丈夫なはずの自分がじつは当てにならないのである。わが国において自殺者数が毎年三万人以上もあり、それがここ十年以上続いていることはきわめて異常だとい

わなければならぬ。平生まともなことをいっていても、いざとなれば糸の切れた凧のように彷徨い、不安と絶望にかられてしまう。そもそも人間は弱い存在であり、また罪深い存在であることを自覚しなければならぬ。

人生の「かべ」に出くわしたとき、何もできなくなり、意気消沈してしまう人も多い。神仏の大きな力にわが身をゆだねることのできる人とそうでない人では大きなちがいが出てくるものである。じっさい自分の体が思うように動くときは、たいして「おかげさま」を感じるものがなくても、大きな病気をしたり、他人の手を借りないと生きていけなくなると、人は「おかげさま」をつよく感じるようになる。自分で食事ができ、普段の生活ができることを幸せに思うのである。²

このように宗教とは、人生の中で思いがけないことが起きたとき、大きなかべにぶつかり、意気消沈してしまった人々の生きる支えの手段の一つであると述べられている。

次に宗教とは何であるのかについてであるが、それは「宗教学的」には研究者によって非常に多様な定義がなされているようである。この点については、例えば、つぎのような説明がされている。

宗教学的に宗教の定義が難しいことは、文化庁文化庁宗教課が昭和三六年にまとめた『宗教の定義をめぐる諸問題』という冊子を見ても容易に納得できる。この冊子には一〇四人の宗教関係者の宗教の定義を集めているが、どれをとっても他と同じものはない。それほどさまざまな定義があり、定義は一致しないのである。しかしこれはすでに特定の宗派宗教の信仰をもったうえで定義しようとか、あるいは宗教学的に定義しよう

とするからである。特に宗教学的に定義しようとする場合、その態度、方法は、人間の宗教心に基づいて生
成され文化的に存在する宗教の側から定義しようとし、しかもそれを社会的文化現象の面から定義しようと
する傾向がある。このような態度や方法では、宗教に関する定義も多様化し、統一できないのはいたしかた
ない。しかし、だからといって、人間にとって宗教の存在はあいまいだということにしてはならない。例え
ば「芸術」の定義についても、芸術家に尋ねれば、芸術家によって定義はさまざまであろう。恐らく芸術家
のあいだで定義を一致させることはできないであろう。が、そのことが芸術の存在があいまいであるとか、
芸術とは不可解なものであるというようにことを意味するわけではない。宗教学的に宗教の定義があいまい
だからといって、宗教の存在があいまいになるわけではない。³

このように「宗教学的」には「宗教」の定義を明確にすることは、非常に難しいことが分かる。それぞれの宗派
によって宗教の定義が違うことが一番の原因である。芸術の定義であっても芸術家によって定義が様々なことと
同じように、宗教もさまざまな定義がある。

第二節 宗教の「教育」とは

しかし、宗教とは、我々人間が人生の中で生き詰まった際に、支えとなるものであり、宗教学的に考えると定
義するには、難しく曖昧な部分があるが、決して宗教の存在が曖昧にはならない事も分かる。そういう状況の中
で、宗教を教育するとはどういうことなのだろうか、まずは「教育」という言葉の意味について考えるところか

らはじめてみよう。

一般的にいったって、「教育」という言葉には、よいイメージがある。というのは、漢字の成り立ちからして「教」も「育」もともと子どもに関係しているからである。中国でもっとも古い漢字事典である『説文解字』によると、なら教とは「上所施、下所効也」（上の施す所、下の効う所なり）であり、また育とは「養子使作善也」（子を養って善を作さしむなり）とある。つまり、「教」とは、上に立つ親や教師が「下のもの」すなわち子どもに知識や技術を施し与えることであり、また「育」とは、子どもを心身ともによくするようにすることである。⁴

このように、言葉の成り立ちから見ると「教育」はまずはその対象となる子どもに関係していることが分かり、親や教師が教育の対象となる子どもたちが育つために必要な知識などを施すことを意味しているということもわかった。

ではなぜ宗教と教育が関係するのか。次に、この問いについて調べてみると、やはりそこには「学校」が関係している事がわかる。

最初にできた学校といえますのは、どこの国でも、その社会の上層階級の子弟のもので、しかも日本でもシナでも古代ギリシャでも、むしろ高等教育機関から始まっております。と申しますのは、初等教育は富裕な家においては家庭において行うことが出来ましたから。日本の場合におきましても、すでに八世紀の奈良朝時代に「大学」の設置されたことが、史料に現われているのであります。

このようなことで、一般の庶民階級の子弟が学校教育の恩恵をうけるにいたるのは、ずっと後教世のことでありまして、それは十九世紀からと、こう申しても差支えないと存じます。それでは一般庶民の教育は、なに行なってきたのであるか、それは宗教ではありません。それが顕著に現われますのは、西洋では中世のキリスト教会であり、学校もまた教会の支配下にありました。

日本の場合は、神仏が協調しながら、あるときは仏教が中心となり、またある面では教が中軸となりながら、わが国民を教育教化して近代にいたったことは皆さまざまよくご存知のことかと存じます。殊に徳川時代における庶民子弟の教育機関であった寺子屋は、その名の示すようにもともと中世の寺院における子弟教育が、その起源でありまして、後になると寺院とはあまり関係のない存在とはなっておりますが、しかし寺院が、そして僧侶が有力な教育者であったことは否定しがたい事実であります。⁵

このように世界的な視点から、学校の歴史を見てみると、どこの国でも、過去においては、初等教育は裕福な家庭でしか受けることができず、一般庶民への初等教育は宗教的機関がそれを担っていたようである。

また日本の場合は、おもに仏教の「僧侶」が一般庶民への初等教育の先生として、それを担っていたことは、日本の教育の歴史を見ることで理解できる。つまり歴史的にみても仏教の僧侶とは、本来教育に携わらなければいけないことが分かった。

第一章では、宗教と教育の定義や意味について調べたのであるが、宗教の存在義としては、我々が人生に生き詰まった際の支えの手段の一つとなるものであり、また教育は、子どもたちに知識などを施す事だと分かった。

また宗教と教育は、学校と切っても切り離せ無いものであり、日本では僧侶が教育に関わっていた歴史があったのだ。

第二章 浄土真宗と宗教教育

第一節 浄土真宗における宗教教育の必要性

浄土真宗では宗教教育、少年教化がなぜ必要なのか。浄土真宗本願寺派では、三つの必要とする理由を述べている。

一つ目は、少年自身の問題についてである。現代子ども論については、多くの人がいろいろな方面から論じているが、東大の松原治郎氏が、『日本青年の意識構造』⁶という本の上で、「現代の青年は豊富な情報の中で育ちながら、一番大切な自分がどうこの人生を生きるかという生きることに関する情報はもっていない」という意味の指摘をされている点がある。例えば、家族がテレビを見ている、昔のように子供が親に質問するのではなく、親の方が、子どもに「この人は誰」とか、「これはどういうこと」と聞かねばならないありさまであり、「お父さんこの人知らないの」「お母さんこんなことわからないの」と得意に答えるのは少年である。親はこのことに何の不思議も感じない、しごく当然のこととし、「うちの子どもは、よくものを知っている」と喜んでいる。テレビに育てられるということは、常に自己が受信機であり、発信機にならないのである。

また最近では、子どもの自殺が多く、このことに対して驚く人は多くいる。少年は両親の姿の中からも生きるということは学べない。思うようになる両親の庇護の中で、思うように変えられるテレビを相手に育った少年たちは、苦しみを乗り越えて生きる人生であるという情報、その苦しみにどうぶつかればいいのかの情報を一度も聞いたことがない。親鸞聖人のみ教えは大人だけのものではない。このように考えると、現代の少年にとって「生きる」ということの学習の場がどうしても必要である。

現代のようにインターネットが大きく発達した現代では、子どもたちは常に、自分が情報の受信機となり発信機にならざるを得なくなっているのだ。また子どもの自殺が増えていることは、苦しみにぶつかることが人生であり、苦しみを乗り越えることが人生であるということを知らない子ども達が増えていることを表している。親鸞聖人のみ教えは、大人だけでなく、現代の子どもたちにも苦しみの生き方について学習する場が必要であると述べられている。⁷

二つ目は社会の問題についてである。一人の青年が、大都会のアパートで死んでいた。彼の死に気付く人はいなかった。これは、遠い国の話ではなく日本の話だ。日本は、かつてなかったくらい、豊かな社会になったといわれているが、何が豊かなのであろうか。

公民館活動に力を入れ、また地域対抗のソフトボール大会などを積極的に行い、人と人との結びつきを回復し、くらしやすい町に、と力を入れる地方自治体、コミュニティセンターなどの施設を充実して、新しい共同体の結成をうながす政府、それぞれ意味のあることだが、人と人との結びつき、人の心の暖かさという問題は、施設

の充実や、外からの働きかけだけでは不充分である。この様な時代にこそ宗祖親鸞聖人の御同朋御同行の精神が必要であり、大人に比べ、少しは素直な少年の時代にこそ、御同朋御同行の精神を知り、体得してほしいものである。

日本は豊かになったと言われているが、一人の青年がアパートの一室で亡くなっている。誰も彼の死に、気づくことができていないことがあった。これは本当に豊かになったと言えるのか。人と人との繋がりがや暖かさを外から働きかけるのは難しいことである。こういった時代にこそ親鸞聖人の御同朋御同行の精神が必要と述べられている。⁸

三つ目は、浄土真宗本願寺派という教団としてである。浄土真宗本願寺派という教団は、「本願」に会い、「本願」に生きるということであるとされている。またその「本願」は、「十方衆生」すなわち生きとし生きる全ての命のためのものである。だから、「本願」に生きる私達の共同体も生きとし生きるもののための共同体でなければならぬのである。

この点について宗祖である親鸞は、「御消息」の中で、

御身にかぎらず、念仏申さんひとびとは、わが御身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため、国民のために、念仏を申しあはせたまひ候はば、めでたう候ふべし。(中略)わが身の往生一定とおぼしめさんひとは、仏の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念仏ここに置いて申して、世のなか安穩なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべしとぞ、おぼえ候ふ。よくよく御案候ふべし。(『浄土真宗聖典・註釈版、七八四ページ])

と述べられている。

第二節 教団にとっての少年期における宗教教育の必要性

教団の組織は、寺院は門信徒のための、組は、門信徒、寺院のための、教区は、門信徒、寺院、組のための、中央は、教区、組、寺院、門信徒のための奉仕機関である。

また浄土真宗の教団を構成する主たる構成員は門信徒である。しかし門信徒というときに、私たちの頭にかぶるのは、普通、成人である。また、現代では成人の中でも特に高齢者の方を浮かべる方が多いのではないだろうか。しかし教団は、十方衆生のためのものである。

また十方衆生とは決して成人だけではなく、男女老少すべてを含んだ十方衆生である。その十方衆生に対応する門信徒も男女老少を含めてのことであり、男女老少のうちの「少」抜きの教団は、浄土真宗の教団としては欠陥教団である。もし、少年教化が考えられないような教団であったら、成人だけのかたよった教団であるだけでなく、十方衆生と呼びかけて下さる本願を、せまい限定されたところでしか受けとることの出来ない悲しい集団になってしまう。

法に遇うということのみに限らなくても、人間の一生において、少年期がどれほど重要性をもっているかは、今さら言うまでもない。少年期のあり方は、その人の一生の生き方を決定するといっても過言ではない。

特に一人ひとりに生きる真の基盤を与え、人間の豊かさを決定する情緒に深くかかわる宗教においては、なお

さらである。西谷啓治氏は「青少年期に感覚を培うことが大事だ」といわれている。これらのことよくふまえて、蓮如上人も、「若きとき仏法は嗜めと候」といわれている。

生涯かけて法を聞いていくことの出来る人生ほど素晴らしい人生はない。その素晴らしい人生は、少年の聞法により容易にひらかれるのである。「法に遇ってくださる人を一人でも多く」と願う教団が、この一番大切な時期を看過することはできない。このような点からも少年教化は私たちにとって必須のものである。

浄土真宗本願寺派のみ教えは、本願に遇い、本願に生きることであり、本願は十方衆生のためにある。十方衆生とは成人だけでなく子どもも含まれていなければ、それは十方衆生とは呼べない。もし子どもが含まれなければ、欠陥教団と言われてしまう。少年期は人間にとって、その後の人生の生き方を左右するといっても過言では無いため、本願に遇うという教えがいかに大切だと述べられているのである。⁹

第三章 浄土真宗と日曜学校活動

第一節 浄土真宗の日曜学校のはじまり

浄土真宗の宗教教育の一つに「日曜学校」というものがある。日曜学校の歴史を見ていくと、日本ではなく海外が発祥であることがわかる。

日曜学校は十八世紀にはじまった。その内容は英国のロバート・レイクス（1737―1811）の場合、

「労働者の児童が墮落する事を憂え、殊に聖安息日に不徳を見習う彼等を保護せんが為め、六歳乃至十四歳の児童を集めて、読書と教会の教理とを学ばしめんと、四人の女教師を聘し、一日一シルリングを支払い、之が教育を担当せしめた」(『宗教教育の歴史的展開』海老沢亮著)のである。英国では、レイクスの例でわかるように日曜学校は教会の外ではじまった。これは英国では公立学校で宗教が教えられるので、教会が直接かかわる必要がなかったからである。これに対して、米国では、日曜学校は教会の内ではじまった。これは、米国の公立学校は宗教教育をしないので、宗教教育を行う責任は教会にあったのである。¹⁰

このように日曜学校は海外を発祥としていくことが分かり、宗教を学校教育として行う国と行わない国で日曜学校での宗教についての教化活動の有無があることも分かる

さらに、日本では、浄土真宗本願寺派の日曜学校のはじまりは、博多・万行寺で七里恒順氏の指導のもと、明治五年に始まった少年会・少女会が日曜学校の始まりとされている。¹¹

浄土真宗本願寺派における日曜学校の定義としては、日曜日に定期的に開く日曜学校だけでなく土曜日に開かれるもの、学校の休暇を利用して開かれる子ども会と呼ばれるものをすべて日曜学校と呼ぶのである。要するに「寺院を中心にした児童の集い」を日曜学校というのである。¹²

また、サマースクールという名前で、年に一回、小学生の夏休みの期間を利用して行う子ども会活動も存在する。

第二節 日曜学校の意義

ここまでは、浄土真宗の日曜学校とはどういうものかについて述べた。ではなぜ日曜学校を行うのか。またなぜ、寺院で行う必要があるのだろうか。浄土真宗本願寺派ではその活動の意義について以下のように述べている。

寺院を中心にするということは、それ以外の場を中心にしては得られないものがある。すなわち、それは「法」である。¹³

つまり日校とは、「法」を中心にした子どもの集いということになる。

「法」を中心にするとは、私のいろいろな問いを、「法」に聞いていくということである。だから、日校とは、子どものいろいろな問いを「法」に聞いていく場である。¹⁴

子どもたちは目に映ったものについての疑問を持つことが多い。そういう意味では、寺院がもっている独特の宗教的空間やその匂いは、寺院に実際に行ってみないと分からない。問いをきっかけとして、それを法を聞く場として展開するためには、やはり寺院が最適だからである。

また、日曜学校の目的としては、以下のように述べられている。

問うということは「聞」ということでもある。「聞」は必然的に語るという方向をもつ。

だから、日校とは、児童を中心にした、聞法の場であり、伝道の場である。

それゆえに、日校の目的とは、児童の問いを、「法」に聞き、「法」を語ることである。¹⁵

子どもが法について、指導者に問いをすることを表している。そして、その問いについて語ることも必然的になってくる。日曜学校の目的とは、子どもの問いを法に聞き、法を語ることが目的だとわかった。

第三節 龍谷大学の宗教教育部と日曜学校活動

浄土真宗本願寺派における日曜学校活動の動きの中で、大切な活動がある。それは龍谷大学の宗教教育部の活動が深く関わっているのである。宗教教育部がどういったものなのか論じる。

当宗教教育部の源流は、現龍谷大学が、明治三十五（一九〇二年）四月に仏教大学から仏教専門大学に改称された際に、教職員、学生、および卒業生等の相互親交を保ち、その学風を刷新し、その精神の涵養等を目的に設立された壬寅会に遡ることができる。

その事業の一環として、明治四十（一九〇七）年には、本科二学生が現職した曙光倶楽部が日曜学校出張講演等を行い、結成半年後には京都の淳風会館にて大会を催しているし、また明治四十三（一九一〇）年には、本科二学生が六角堂の京都日曜学校で、本科一学生が京極平等講の起信日曜学校で生徒を集め、宗教教育を施したことが知られている。さらに、明治四十四（一九一一）年三月十六日から十日間執行された、親鸞聖人六五〇回大遠忌法要における学生の経営する日曜学校の活躍は著しく、道光日曜学校（現本願寺中央日曜学校）は、法要の前後に施本伝道や讃歌伝道を行い、起信・京都・深草・久遠日曜学校等は合同大会を

催すなど、その活動ぶりは、児童宗教教育の必要性を一般に認識させる一助となったともいえる。

この部は、オルガンや声楽等の研究を行う音楽科と、法話やお伽話を研究する実習科の二部から成り、大正十（一九二一）年六月の「日校部」への改称を経て、大正十四（一九二五）年九月以来、現行名の「宗教教育部」となったのである。¹⁶

このように龍谷大学の宗教教育部の歴史を見ていくと、宗教教育部は、龍谷大学の職員や学生らが中心となり、設立から一〇〇年以上が経っていることがわかる。親鸞聖人六五〇回大遠忌法要における学生らの活動により、宗教教育部の存在が知られることとなった。

次に宗教教育部の最盛期について記述があるので、そのことについて紹介しておこう。

この大正後期から昭和初期にかけて、本願寺との密接な関係の中で、宗教教育部は戦前における最盛期を迎えていくのである。ちなみに、宗教教育部の部員が配属された京都市内の日曜学校は、大正八（一九一九）年の十八校・部員数七十余名から、昭和十（一九三五）年には四十校に及んでおり、この時期に、日曜学校運営のノウハウも確立されたといえる。

一方、大正十一（一九二二）年に仏教大学から龍谷大学への改称がなされた頃、京都の学生達を中心に広がった部落改善セツルメントは、同宗教教育部にも少なからず影響を与え、新たな活動の一面を形成してゆくことになるのである。¹⁷

宗教教育部は、大正後期から昭和初期にかけて最盛期を迎えたことが史料からわかった。日曜学校の数も四〇

校にも及んでいた。

だが、宗教教育部は第二次世界大戦の影響により、それまで行なっていた活動を一時的に休止しなければならなくなってしまう。¹⁸

次に第二次世界大戦後の宗教教育部が行ってきた活動についての史料にも触れる。

昭和二十（一九四五年）十月十日をもって龍谷大学が再開されたのに伴い、翌二十一（一九四六）年一月には、有志十数名が集まって同宗教教育部も復活されたのである。そして同年四月には、山崎昭見・中川正文・得能義憲らによって部員の募集が行われ、集まった六十余名の部員は、日曜学校再開についての応援依頼があった京都市内の寺院へ、研鑽をかねて、早速にと派遣されている。

さらに翌昭和二十二（一九四七）年五月には、京都女子専門学校（現京都女子大学）にも宗教教育部が正式に結成され、龍谷大学と合同で龍谷学園宗教教育部が設立されるに及んで、その活動ぶりは一層のものとなつてゆくのである。部員数も、龍谷大学約百五十名、京都女子専門学校約五十名で、都合二百名を数えていたことが知られている。

こうした活動の隆盛ぶりの背景にあったのは、言うまでもなく、前述したごとの荒廃した戦後の日本の姿、とりわけ子ども達のありさまであり、それを黙視するのに忍びない宗門学徒の存在であった。¹⁹

第二次世界大戦後の宗教教育部は、第二次世界大戦の影響により中止されていた活動を、荒廃した戦後の日本や子どもたちのありさまを黙視できない有志の学生らによって再開させた。部員数は最盛期と言われていた、戦

前よりも多く二〇〇人にも及んでいた。

今日に至るまで宗教教育部は、活動を続けており、浄土真宗本願寺派における子どもたちへの布教活動の一端を担っている。現在の宗教教育部の部員は約二〇人に減っているが、活動内容に大きな変化はなく、子どもたちへの布教活動を行っている。

第四章 宗教教育の問題

第一節 宗教教育全体の問題

第一章と第二章では、宗教教育がなぜ大切なのか述べてきたが、第三章では、浄土真宗の日曜学校の活動について検討した。最後に、本章ではこれからの宗教教育について、どのような課題があるのか、その問題について述べる。宗教教育についての問題はいくつか存在するが、この論文では抜粋して紹介する。

西元宗助氏は日本での宗教と教育の在り方について以下のように述べている。

もとより宗教の退潮は、一応は世界的な傾向ではあろう。しかし自由圏の国家だけに限っていえば、わが国の知識階級したがってまた教師ほどに宗教を軽視している国柄はすくない。知識人の中には無宗教であることを却って誇りとさえ思っているものがあるほどである。しかし宗教は、このように軽視あるいは無視されてよいものか。これを我が国についてみても庶民衆は今日においても案外に宗教性を、その内面につつま

禁 廠

深く保持している。いわゆる文化人は、「現代の日本人は無宗教的であるといい、なかには外国人に同調して自嘲的にエコノミック・アニマル」などというが、そして確かにそのような傾向もあるにはあるだろうが、しかしそうとばかり見るのは皮相の一面の見解にすぎないであろう。²⁰

西元宗助氏は、宗教が退潮していることは世界的なことであるが、日本ほど宗教を軽視する教師がいる国はないと述べている。日本人は内面では信仰が深いとされているが、自分は無宗教だと言い張る人が多い。

また西元宗助氏は、日本人の宗教観に対して次のように述べている。

現に、この正月の京都でも平安神宮や祇園神社などへの初詣の人々の数の如何に多かったことか。しかも大晦日の深夜から元旦の早暁にかけて民衆は絶えることなく陸続として群参したという。これを仏教についてみても、昨春の親鸞聖人誕生八百年記念法要をはじめとする仏教各派の法要に地方から京都に団参した信者の数は無慮数百万に達したという。それは取材にあたった新聞やNHKの担当記者を驚かせたほどの数で、しかも、その敬虔な信仰態度には、あらためて考えさせられた、とこれらの記者をしていわしめるものがあった。

このように見てくると、日本人の多くは今日でも決して無宗教とはいえない。いや、すくなくとも非宗教的ではない。ただ注目すべき問題の一は、その宗教心が概して無自覚的情緒的、かつ習俗的で、慣習化されてしまっていることである。そのため日本人独特の習俗的な重層信仰をうみ、結婚式は神式で、お葬式は仏式でということにもなっている。²¹

日本人の多くは、大晦日や正月の参拝に行き、仏教では親鸞聖人誕生八百年記念法要など各宗派での法要などでは多くの人が参列している。これは日本人が無宗教とは到底言えない。

次の世代を担う子どもたちに教育を行う「教師」が、正しい宗教を知る必要があると、西元宗助氏は述べている。

第二節 浄土真宗の日曜学校での問題点

浄土真宗の日曜学校については第二章で述べたように、長い歴史があることが分かった。だが長い歴史があるということは、様々な問題が起きてきたと言っても過言では無い。この節では、実際に日曜学校を開催して起った問題点を抜粋して紹介する。

一つ目は、子どもへの理解が欠けていた。具体的には、子どもの発達心理をしっかりと認識していなかったために、平面的な指導になってしまったことだ。²²

二つ目は、計画性の問題。日曜学校の頻度を明確に決めておらず、その場限りで無計画で行われていた。²³

三つ目は、指導者の不足だ。近年の住職は、とても多忙であり、特に日曜日は寺の行事があり、婦人会の方々も忙しく日曜学校を手伝う余裕が無い。²⁴

四つ目は、寺院の経済逼迫である。近年のお寺は、僧侶の仕事以外に学校の先生などとの兼業している寺院が多くある。その中で日曜学校の運営に踏みきるだけの精神的、経済的、時間的余裕が無い寺院が多いのが現状で

ある。²⁵

他にも多くの問題が日曜学校の運営を行うにあたって存在する。

具体的な解決策については、それぞれの寺院や日曜学校について、相違点が多くあるため、この論文では控える。

結論

この卒業論文では、浄土真宗の宗教教育について論じた。様々なことが発展している今日の日本において、人々の無宗教化、また、僧侶自身の意識低迷により仏教はより衰退しているとは様々な文献を見ると一目瞭然である。本来、地域のコミュニケーションの中心としての役割があった寺院が、葬式を中心とした「経済活動」により、苦しんでいる人々に寄り添うことが出来ていないのが現状だ。このことは、子どもたちへの宗教教育にも影響が出ている。寺院存続のための経済活動にしか手が回らず、寺院本来の活動を行えてない寺院は、数多くある。

この卒業論文では、まずなぜ宗教教育が僧侶に必要なのか、これからの寺院社会に必要なのか論じるところから検討を始めた。第一章では宗教と教育がなぜ関係しているのかについて検討した。具体的には、宗教は人々が

生きる詰まった際の支えの手段の一つであり、生き詰まるのは大人だけでなく子どもも同じことである。また教育とは子ども達へ教えを施すことである。学校の歴史を見ると、日本だけでなく世界的に庶民階級の子どもたちへの教育をおこなっていたのは、宗教者であり、日本においては仏教寺院の僧侶が庶民階級に対する教育を施していたという歴史がある。このように宗教と教育は、歴史を振り返ると、宗教と切っても切り離せない関係であり、特に日本では僧侶が教育者の役割を果たしていたことが分かった。

第二章では、浄土真宗と宗教教育の関係について述べた。浄土真宗本願寺派では、なぜ宗教教育が必要なのかを三つ述べている。一つ目は、少年自身の問題である。インターネットが大きく発達した現代では、子どもたちは常に、自分が情報の受信機となり発信機にならざるを得なくなっており、近年子どもの自殺が増えていることは、苦しみを乗り越えることが人生であるということを知らない子ども達が増えていることを表している。親鸞聖人のみ教えは、大人だけでなく、現代の子どもたちに苦しみとの生き方について学習する場が必要であると述べられている。

二つ目は、日本の社会の問題である。日本は豊かになったといわれているが、一人一人の死にさえも気づくことが出来ていないこともある。これでは本当に豊かになったと言えるのか。人と人との繋がりや暖かさを外から働きかけるのは難しいことである。こういった時代にこそ親鸞聖人の御同朋御同行の精神が必要であることが示されている。

三つ目は、浄土真宗本願寺派という教団が伝えようとしている教えとの関係である。浄土真宗本願寺派という

教団は、「本願」に遇い、「本願」に生きるということであるとされている。だから、「本願」に生きる私達の共同体も生きとし生きるものための共同体でなければならぬのである。また本願は、十方衆生のためにある。十方衆生とは成人だけでなく子どもも含まれていなければ、それは十方衆生とは呼べない。もし子どもが含まれなければ、欠陥教団と言われてしまう。少年期は人間にとって、その後の人生の生き方を左右するといっても過言では無いため、本願に遇うという教えがいかに大切だと述べられているのである。以上の三つが浄土真宗本願寺派での宗教教育の必要性である。

第三章では、浄土真宗での日曜学校活動についてである。日曜学校の歴史と日曜学校の意義について史料を元に述べた。浄土真宗の日曜学校活動の中で大きく貢献している、龍谷大学の宗教教育部の歴史と現在の活動についても述べた。宗教教育部は、龍谷大学の職員や学生らが中心となって設立されてから、すでに一〇〇年以上が経っているのである。また親鸞聖人六五〇回大遠忌法要における学生らの活動により、宗教教育部の存在が知られることとなった。宗教教育部による、日曜学校での宗教教育は、大正後期から昭和初期にかけてその全盛期を迎えたようであるが、第二次世界大戦によりその活動は休止されてしまった。しかし第二次世界大戦後には、有志の学生らによって日曜学校活動を再開された。その部員数だけ見ても宗教教育部の活動の最盛期と言われている。戦前よりも多く二〇〇人にも及んでいたのである。残念ながら、現在は最盛期と比較すると、部員が減ってしまったが、子どもたちへの布教活動は変わりなく行われている。

第四章では、宗教教育全体の問題と日曜学校における問題について抜粋して述べた。西元宗助氏は、宗教が退

潮していることは世界的なことであるが、日本ほど宗教を軽視する教師がいる国はないと述べ、日本人は内面では信仰が深いとされているが、自分は無宗教だと言いつ張る人が多いと述べている。正月の初詣などを見ると、日本人の多くは、無宗教だと到底言えないとも述べている。

このことを踏まえて、宗教教育全体としては、子ども達へ教育を行う教師が正しい宗教を知ることが必要であると述べられている。日曜学校の問題は、子どもへの理解、指導者不足、計画性など様々な問題点があることがわかった。しかしそれらの問題に対する具体的な解決策は、それぞれの寺院によって抱えている問題が違うため、この論文では具体的な解決策についての考察は、今回は控えることにした。

この卒業論文を書くことを通して、序論で述べた宗教教育の意義や浄土真宗における宗教教育の在り方や歴史、問題点を深く学ぶことができた。その中で現在の浄土真宗の宗教教育についての問題点も明らかになってきた。しかし、具体的な解決方法は、この卒業論文では述べることはできなかつたが、それは今後の課題として引き続き研究を続けていきたいと思う。これから私が僧侶の一人として、子ども達への宗教教育を行っていく上で解決方法を模索していこうと考えている。

1 宮城顛・信楽峻磨・田畑正久・水島見一・松田章一『宗教と教育―人間性の回復を求めて―』五七頁。

2 海谷則之『宗教教育研究』一一頁。

3 杉原誠四郎・大崎素史・貝塚茂樹『日本の宗教教育と宗教文化』一〇四頁―一〇五頁。

4 海谷則之『宗教教育学研究』二七頁―二八頁。

5 西元宗助『教育と宗教のあいだ』三九頁―四〇頁。

6 松原治郎『日本青年の意識構造』(弘文堂、一九七五年)

7 浄土真宗本願寺派組織部『少年教化のてびき』一頁―二頁。

8 浄土真宗本願寺派組織部『少年教化のてびき』二頁―三頁。

9 浄土真宗本願寺派組織部『少年教化のてびき』三頁―四頁。

10 浄土真宗本願寺派組織部『少年教化のてびき』一六頁。

11 浄土真宗本願寺派組織部『少年教化のてびき』一六―一七頁。

12 浄土真宗本願寺派組織部『少年教化のてびき』一六―一七頁。

13 浄土真宗本願寺派組織部『少年教化のてびき』一二―一三頁。

14 浄土真宗本願寺派組織部『少年教化のてびき』一三頁。

15 浄土真宗本願寺派組織部『少年教化のてびき』一三頁。

16 日曜学校沿革史編纂委員会『日曜学校沿革史―本願寺派少年教化の歩み―』一七頁―一八頁。

17 日曜学校沿革史編纂委員会『日曜学校沿革史―本願寺派少年教化の歩み―』一八頁―一九頁。

18 日曜学校沿革史編纂委員会『日曜学校沿革史―本願寺派少年教化の歩み―』一九頁。

19 日曜学校沿革史編纂委員会『日曜学校沿革史―本願寺派少年教化の歩み―』七八頁―七九頁。

20 西元宗助『教育と宗教のあいだ』六七頁―六八頁。

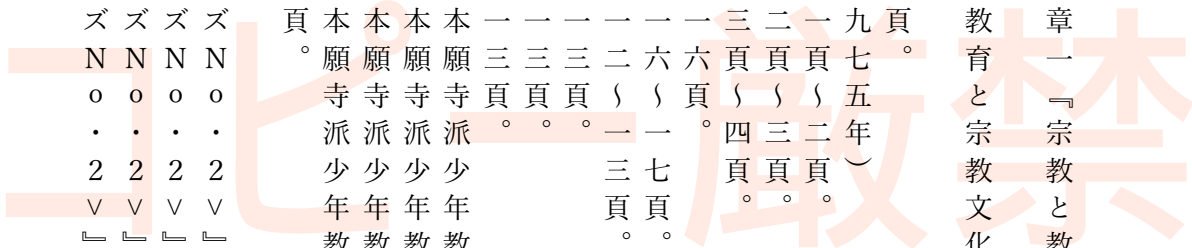
21 西元宗助『教育と宗教のあいだ』六七頁。

22 平林宥高編『日校運営の実際』日校叢書シリーズN〇・2V』五八頁。

23 平林宥高編『日校運営の実際』日校叢書シリーズN〇・2V』五九頁。

24 平林宥高編『日校運営の実際』日校叢書シリーズN〇・2V』五九頁。

25 平林宥高編『日校運営の実際』日校叢書シリーズN〇・2V』六〇頁。



参考文献

- 海谷則之『宗教教育学研究』法藏館、二〇一一年
- 杉原誠四郎・大崎素史・貝塚茂樹『日本の宗教教育と宗教文化』文化書房博文社、二〇〇四年
- 浄土真宗本願寺派組織部『少年教化のてびき』西村信天堂、一九八〇年
- 宮城顛・信楽峻磨・田畑正久・水島見一・松田章一『宗教と教育―人間性の回復を求めて―』東本願寺出版、二〇一六年
- 西元宗助『教育と宗教のあいだ』新潮社、一九九一年
- 日曜学校沿革史編纂委員会『日曜学校沿革史―本願寺派少年教化の歩み―』浄土真宗本願寺派少年連盟、二〇〇七年
- 平林宥高編『日校運営の実際―日校叢書シリーズNo. 24』全国青少年教化協議会、一九六三年

コピー厳禁